

## A Minimalist Approach to the $\theta$ -system

萱嶋, 崇

<https://doi.org/10.15017/4059960>

---

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (文学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 :

氏 名	萱嶋 崇			
論 文 名	A Minimalist Approach to the $\theta$ -system ( $\theta$ システムへのミニマリストアプローチ)			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	西岡 宣明
	副 査	九州大学	教授	大橋 浩
	副 査	九州大学	教授	久保 智之
	副 査	九州大学	名誉教授	稲田 俊明

## 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

生成文法理論は、1990年代以降ミニマリストプログラム (MP) の研究戦略をとることにより、人間言語の本質の解明に向け着実に進展してきた。具体的には、Chomsky (2000)のフェイズ理論、Chomsky (2007, 2008)の素性継承理論を経て、現在 Chomsky (2013, 2015)のラベル理論が大きな影響力をもつ。本論文は、主語と動詞の形態の一致を示す西洋の言語（特に英語）を中心に展開されてきた従来のラベル理論では日本語のような一致を示さない言語の説明ができないことを出発点とし、述語が項に付与する意味役割を統語的に反映させる新たなメカニズムを提示することにより、格の問題とラベルの問題を同時に解決することを試みた独創性の高い野心的なものである。本論文の分析は、話題、焦点といった談話レベルの概念を文 (TP) の上位構造 (CP) 内に組み込み、その統語構造を精緻化する Rizzi (1997)以降研究が進められてきたカートグラフィー分析を動詞句 (vP) レベルでの意味役割に応用したものであるが、本論文で提案するメカニズムにより、能動文、受動文、使役文、そして心理動詞といった日本語の多岐にわたる構文の様々な問題が解き明かされ、さらに英語の4種類の使役構文の文法的、意味的違い、心理動詞構文に関する逆行照応、弱交差の問題の解明に寄与することを実証した。本分析は日英語の対照研究により、一つの言語のみを観察していてもわからない言語の原理を解明する生成文法の醍醐味を示したものといえる。

1章で、本論文の動機と目的、概略を述べた後、2章で、Chomsky (2013, 2015)を、また日本語の分析として Saito (2014)を概観し、その問題点を指摘した。加えて Rizzi (1991)のカートグラフィー分析、Dowty (1991)と Jackendoff (1990)の意味役割に基づくマッピング理論を概観し、これらの先行研究を vP 領域に適用することで、問題点が解決されることを示唆した。3章において意味役割を素性として扱った vP 領域におけるカートグラフィー分析を提案した。また、従来想定されてきた意味役割を細分化した素性( $\theta$ 素性)の照合に基づく格照合メカニズムを提案し、Saito (2014)では捉えられなかった与格の照合メカニズムと関連する統語現象を射程に捉えた。4章において、前章での提案をもとに日本語の能動文、受動文、使役文、そして心理動詞の項構造を精査することで、全構文に共通したカートグラフィーを提示した。また3章で提案された格照合メカニズムによって、それぞれの構文で出現する与格名詞句の分布を正しく捉えることができることを示した。5章では、英語が意味役割に基づく $\theta$ システムを部分的に採用していることを示し、get や have が受動文、使役文で使用される事実、また let や have が受動化できない事実を本論文の枠組みで説明した。また心理動詞構文において観察される逆行束縛現象が、本論文で提案した $\theta$ システムを同構文

の派生に想定することで説明できることを示した。6章では、TP以上の領域において談話素性がラベリング、格照合について必要不可欠であることを示した。7章において本論文における議論を総括した。

本論文の最大の特徴と利点は、最先端の理論的分析を注意深く吟味した上で、理論的側面と経験的側面の両方から最適のモデルを提案し、日英語の様々な構文の分析を通じて、その妥当性を実証的に示した点にある。その論考は、従来の研究の問題点を克服し、統語構造と意味構造とのインターフェイスを明らかにしたものであり、今後のラベル理論研究の方向性を示したのみならず、従来のアプローチではうまく説明できなかった現象そのものに対する理解を深めた重要な分析として、生成文法における理論研究に大きな貢献をするものと評価できる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。